
少女時代

玉木 もとか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

少女時代

【ZPDF】

Z1810Z

【作者名】

玉木 もとか

【あらすじ】

西垣優花のお話である。

小学生、中学生と成長していく過程での、西垣優花の心が描かれている作品です。

プロローグ もしも出来なかつたら (前書き)

このお話は実話です。

あまり、文章を書くのが上手ではありませんので、その所この理解
いただけるようお願ひいたします。

アドバイス、感想、コメント等ありましたら、是非お願ひします！
では、お楽しみください。

プロローグ もしも出会ってなかつたら

プロローグ もしも出会ってなかつたら
もしも私は彼女と出会つていなかつたらどうなつていたのだろう
かとたまに考える。

もしかしたら、今よりずっと良い人生だつたかもしれない。
もしかしたら、今よりずっと悪い人生だつたかもしれない。

分からぬ。

それが私の結論だ。

もし、私が彼女に出会つていなかつたとしても私は恐らく同じ壁
にぶつかつていたと思う。
でも、それを思い知るのはもつと遅い時期だつたかもしれないし、
そんなにも大きな壁だつたなんて気付きもしなかつただろう。

ただ、壁が見えるだけ。

それで終わつていたと思う。

私は彼女と出会つて、変わつた。
変わつた事が良かつたのか、悪かつたのか。

それさえも分からぬ

第一章 王領ご（繪書也）

すみません。

前の更新のとおり言い忘れていたのですが、このお話を少しごと
まつげとに更新していきます。
まことにごめんなさい。
まことにごめんなさい。

第一章 出会い

第一章 出会い

「皆さん。新しい仲間が増えます。名前は西垣優花さん」「よろしくお願ひします」

私は小さく頭を下げる。

私の家庭では転勤が多い。父の会社による都合のためだ。いわゆる転勤族である。

幼稚園のときは小学校に入る前に一度転勤をし、新しい地での小学校生活は僅か一年しかなかつた。

その免疫があつてか、別れが悲しい事も無かつた。それは長いられないなかつた事もあつただろうが。

これも免疫があつてか、新しい地に来て新しい学校生活に不安は抱かなかつた。

そして、小学校二年生となつた今、また新たに転校をしたのだ。

そこは、全校生徒が900人前後と大きな学校だった。
創立100年となり、古い校舎なのだが、補強工事がしてあり、災害に対しては安全である。

私は担任の先生に連れられ、二年一組の教室に入る。

そのときの第一声が、「うわっ。こいつ小せえ～」だつた。

それを言つたのはクラスで一番大きい男の子である。

「小さい」と言われた事なんて何回もあるので、むつともしない。

その男の子とは十センチ以上は絶対に背の差があつたと思つ。私は小学校二年生の頃は百十五センチ程しかなかつたのだから。

その日のうちになんとなくクラスのこの質問に答え、和気藹々とクラスに馴染めた。

そして、担任の先生に、

「今日はどうだった？クラスの皆とは仲良くなれそうかしら？」

と言いつ。

担任の先生は小太りで、優しいふいんきを持つ先生だった。その担任の先生が私が帰る直前に呼び止め、声をかけたのだ。

私はなんと答えていいのかも分からず、

「はい。仲良くしていく事ができそうです」

と曖昧に答える。

担任の先生は「そう」と短く答え、微笑む。

こうして私の転校初日の学校生活は終了した。

そして二日目。

転校初日には欠席していた少女が学校に来ていた。

そして、毎日行われる健康観察のときが来た。

その健康観察は出席番号と名前、今日の体調を言つのだ。私の場合、「出席番号三十四番西垣優香」となる。

それは普通の人にとっては造作もないことだが、初日に欠席していた少女には大変な事だった。

「はい。出席番号は？」

担任の先生は毎日の事なのだろうか、少女に優しく近づく。

「出席番号……五番」

それは今にも消え入りそうな声である。

私は辛うじて少女と席が近かつたため、聞こえたが教室の隅々まで聞こえるような声では決して無い。

「それじゃあ、名前は？」

「大野……紗枝」

それは本当にか細い声でこちらまで不安になつてくる。

私は大野紗枝をひそかに応援した。

実際に声を出して応援している人もいるが、私には大抵そんな事は出来ないだろうと思う。

クラスの何人かはこのやり取りをうつとおしいと思っていたのだろうか、とついぶん経つてからこのやり取りを思い出すとそう思った。私はそのときはとても素直で、人に裏表なんて無いと思っていた。

「元気ですか？」

「げ……元気です」

その声はあまり元気じやないような声にも聞こえるが、これが地なのだろうと直感的に思つ。

「はいっ。よくできました」

先生は軽く少女の肩をたたく。

そして、大野紗枝の健康観察が住んだ後はだいぶスムーズに進み、私も最後に健康観察を終える。

その後、先生は大野紗枝が今日健康観察ができた事を褒め、朝の会を終えた。

大野紗枝という少女は、大人しく控えめのようである。

あまりクラスの子と話はしていなかつた。話しかけられたら、今にも消え入りどうな声で短く会話のやり取りをしていくようである。私は少し緊張しながらも大野紗枝に声をかけにいった。

「私、昨日転校してきた、西垣優香。宜しくね」

大野紗枝は少しの間、目を瞬く。そして、はつとしたようにあわてて答える。

「よ……よろしくね」

「ねえ。貴方の事、なんて呼べばいい？」

「……何でもいいよ」

少し戸惑つたように間を空け、答える。

「それじゃあ、紗枝ちゃんでいい？私のことはなんて呼んでくれてもいいから」

私は仲の良い子でも決して呼び捨てにはしない性分だった。そのため、この少女に対しても“ちゃん”付けである。

「それじゃあ……優香ちゃんでいい？」

「うん。いいよ」

私はなんとなく彼女とうち溶け合えたような気がした。

第一章 生まれて初めての友達との喧嘩

第一回 生まれて初めての友達との喧嘩

そして、私は紗枝ちゃんとかなり仲良くなつていった。

私は紗枝ちゃんとときを過ごすのは好きで仕方が無かつた。紗枝ちゃんは、私が思つていたよりは明るい子で、普通に話せるようになつていた。

今思うと、紗枝ちゃんから見て私はうつとおしい女だと思つていたんじゃないかと思つ。自分の話ばかりで、相手の話を聞く事もしていたが、そのくだらない話に一方的に話を着き合わせていたんじゃないか、と。

当時の私はそんな事を考えもせず、紗枝ちゃんと接していた。

私は習い事などもしていたため、あまり紗枝ちゃんと遊ぶ機械は多い方ではなかつたが、私にしては紗枝ちゃんと過ごす時間は他の者と比べればかなり多かつた。

そして、ある日、紗枝ちゃんの家に遊びに行つた。

それは紗枝ちゃんと過ごすようになつてからしばらくした時の事で、紗枝ちゃんと遊ぶ事が日課にもなつっていた。

その日は復旧しつつある携帯ゲーム機を持って遊びに出かけた。

「うわあ。色々なソフトを持つてるんだね」

「うん。ちょっと言つたら買つてもらえるんだ」

三十個ほどのゲームソフトがケースに入つており、どれも新鮮味あふれる物ばかりだつた。

「…………いいな。家では誕生日とかしか買つてもらえないこともあるんだよ誕生日の日ですら買つてもらえないこともあるんだよ」

「えつーうなの?可哀想。ねえ、このゲームはやつた事あるの?これ、通信プレイが出来るんだ。やってみない?」

一つのゲームソフトを指差しておひ、そのゲームはコマーシャル

なので最近発売された物だ。

「うん。やるやる」

私はそのゲームは気になつていて、それがやれるのならばと思いつんでその話に乗つた。

本人のゲームソフトと言つだけあつて、紗枝ちゃんはゲームをするのはうまかつた。

だが、私はゲームをするのは頭を使う物意外はあまり得意ではなく、私は明らかに紗枝ちゃんよりも技術で劣つていた。

そこで、少しだけ悪口を言つてしまつた。

「いつものアイテムばっかり使うんだね」

それは悪口というより嫌味に近かつたかもしれない。
それにもつとしたのか、

「優香ちゃんだつて、使おうとしてるじやん」

しばらく無言になつて、私は紗枝ちゃんにまた何か言つ。

そして、紗枝ちゃんも私に何か言つ。

私はさほど苛立つてはいなかつた。だが、悪口を言つていのちにそれが当たり前になつていつて悪口を言つてしまつていた。

そして、紗枝ちゃんもそれに応じて返答する。

それの繰り返しだつた。

それを繰り返して、その間ですら苛立ちを持たなかつた私は、帰りのチャイムがなつてゐる事に気づく。

「あつ！そろそろ時間だ。帰らなくちゃ」

私は断りをいれずに通信していいたゲーム機の電源を切る。
紗枝ちゃんは自分のゲーム機の電源を切り、ソファーに放り投げる。

一階にいた私達は一階へ降りていぐ。

私は何の前触れも無く、気ままに降りていぐ。だが、紗枝ちゃんの足取りは妙に遅かつた事は覚えている。

「じゃあね」

私は玄関に行き、そう言つて軽く紗枝ちゃんに手を振る。

こつもは「じゃあね」というような軽い挨拶をくれるのだが、その返事は無くて、紗枝ちゃんはただ手を振っているかどうかも分からぬほど曖昧に小さく手を上げただけだった。

今思つと、私はまつたくと言つてもいいほど怒つてはいなかつたが、紗枝ちゃんはそれなりにおりつていたのではないかと、いまさらながらに思つ。

紗枝ちゃんこと口づんかをしてから次の日。

私は紗枝ちゃんに会い、

「おは

と言つ。

紗枝ちゃんは一瞬驚いたように目を大きく見開いたのを良く覚えている。

「おはよ

その声は耳の良い私にもあまり聞こえないようなぐらの声だったが、私には「おはよ」「おは」などと聞き取れた。

生まれてはじめての友達との喧嘩はあまりにも軽い物で、始まりも終わりも分からぬような喧嘩だった。

喧嘩と呼んでいいのかさえ分からない。

これが、紗枝ちゃんとの喧嘩で、最初で最後の紗枝ちゃんとの喧嘩だった。

当時、いつもこのことで謝る事の無かつた私は、本気で謝るほどの喧嘩ではないと想つていたのか、それを私は思い出せなかつた。

第三章 出来なかつた事 ？

第三章 出来なかつた事

私は小学一年生の冬。十一月頃の事。

私は年間行事でその当時、一番嫌いな行事のある日だった。
それは持久走大会だった。

私は決して運動神経の良い方ではない。そして、持久力も無い。
そのため、毎年行事にあるよつた運動会や持久走大会が嫌でいや
で仕方が無かつた。

転校してきた学校では朝の時間と言つ物が設けられており、その
時間では読書をする。たまに、ボランティアの読み聞かせもあり、
私はその時間が好きだった。

だが、十一月の下旬になると、その時間は運動場を走ると言つ物
に変わる。

それは、私にとつて悪夢のよつた物だった。

そのため、十一月の下旬から十一月の中旬は、私にとつてあまり
いい年ではない。

私は当時も今も真面目な生徒だったため、やるからには精一杯頑
張つてはいた。

そして、そんなある日。

私は紗枝ちゃんの走りを見て驚いた。

紗枝ちゃんは内気の割りに、運動神経はかなり良かつた。

私は走り終わつた紗枝ちゃんに急いで駆け寄る。

「す、すごいね。紗枝ちゃんは！」

走り終えた紗枝ちゃんの順位はなんと、一位だった。

私は後ろから数えた方が早いぐらいの位置にいる。

「えへへ。私が得意なのつて運動ぐらいしかないので

「えへへ。私が得意なのつて運動ぐらいしかないので

紗枝ちゃんは小さく照れ笑いをする。

「本当にすこいね。本番も頑張つてよー。」

「うん」

そして、紗枝ちゃんは本番でも一位との差をつけて一位になった。

そして、私達は小学校三年生になつた。

それまでの時間はあつという間に過ぎていつた。

今回の持久走大会でも、紗枝ちゃんは一位を取つた。一位との差をつけて。

だが、それは紗枝ちゃんの最後の持久走大会の一位だった。

そして、三年生を無事に終え、私達は四年生となる。

四年生となつたとき、ある事件は唐突に起きた。

私は小学校の事を思い出しても大まかな事しか覚えていない。それだけ、記憶も薄れ、覚えるほどの事ではなかつたのか、と今では思う。

だが、私はこの事件を忘れる事は一生無いだらうと思つ。

その事件は突然舞い降りる。

四年生の十一月の上旬。そろそろ持久走の練習が始まる頃である。

「ねえ、紗枝ちゃん」

「な、何」

紗枝ちゃんに声をかけたのは、吉田亜佐美ちゃんだつた。

紗枝ちゃんは陸上教室に通つていて、その吉田亜佐美ちゃんも陸上教室に通つているのだと紗枝ちゃんから聞いた事がある。

「あの方、今度市の大会があるじやん?」

「うん」

紗枝ちゃんは何か怯えながら頷いている。

私はその場で、紗枝ちゃんは何を怯えているのだろう、と思つ。いつもは普通に話しているのだ。

紗枝ちゃんの亜佐美ちゃんにたいする態度が変わったのはつい最近である。

何があつたんだろう?

「それでさあ……。その市の大会が、学校の持久走大会。どっちかさあ、一番をあきらめてよ。それで、私に一番を頂戴」

はあ?

私は思わず眉をひそめる。

頼んでるにしては態度でかすぎないか!? それに、そんなことしたら八百長じやん。

「…………」

紗枝ちゃんはそれを聞いて困ったように顔をゆがめている。

「ねえ。それじゃあ、考えておいてよ」

私は亜佐美ちゃんに對して疑念を積もらせたが、私は何も言えなかつた。

私がじつと麻美ちゃんのほうを見ているが本人は気付かない。

「ねえ。話の続き、何だっけ?」

「あ、そうそう」

私は麻美ちゃんのせい切り上げられていた、話に戻した。

私が亜佐美ちゃんが紗枝ちゃんに八百長をしるといつているのを知つてからも、飽きることなく何度も言つて来ていた。

私は亜佐美ちゃんに何かいおつと思ったが、何もいふことが出来ずになつた。

それは、「お前に何が分かるんだ」みたいな事を言われたら何もいえないような気がしたのだ。

そして、何もいうことが出来ずについて、そのまま何の進展も無くそれを繰り返した。そして、私は何かいわなかつた事を後悔する事になる。

あれ。今日は着てないのかな?

持久走大会の一週間前。紗枝ちゃんは学校を休んだ。

私は風邪かな、と思って、その日は仕方が無くいつもはしない読書をした。

そして、次の日も。また次の日も紗枝ちゃんは休んだ。
大丈夫かな……。あと少しで持久走大会なのに……。
今日も着てない……。

私は紗枝ちゃんのいない空いた席を見つめた。
すると、先生がなぜか暗い顔をして入ってきた。

いつもは明るくて元気な先生なのに……、どうしたんだろう。
「今日はお知らせがあります」

先生はいつもよりワントーン低い声で話し始める。

「朝の会ではなく、一時間目の総合のときに話そうと思います。それでは朝の会を始めましょう」

少し先生は元の口調に戻し、朝の会を始めた。

私は先生が何故あんなにも深刻な顔をしているのか。心のどこかで分かっていたのかもしれないが、私にははつきりと分かっていかつた。

そして、朝の会が終わり、気に掛かりながらも私は読書を始めた。しばらくすると、一時間目の始めのチャイムが鳴り、先生が入ってくる。

そして、挨拶をし、みんなが席に着いた。

「それでは……お話をしますね」

先生は一度そこで言葉を切り、クラス全体を見渡す。

「現在、紗枝算は学校をお休みしていますね。前までは風邪だと言つていましたが、本当は風では無いんですね」

え？

クラスでざわめきが広がる。

だが、先生が注意するとそれはすぐに納まった。

そして、私はそれを聞いて先生の顔をより一層真剣に見る。

「今日は亜佐美さんも学校を休んでいますよね？」

私はさつと亜佐美ちゃんの席を見る。そこにはいつも元気にしている
麻美ちゃんの姿はない。

もしかして……

「知っている人もいるかもしだれませんが、亜佐美さんは紗枝さんに
市の大会か持久走大会の一位をあきらめてくれ、と言っていたそ
うです」

それが原因……？

「それで、亜佐美さんは責任を取るためにも、明日の持久走大会に
は出場しないそうです」

私はそれを聞いて何故か腹がたつた。

紗枝ちゃんは運動神経がよくて、いつも徒競走や持久走で一番を
とつていた。それがすごいと思って、紗枝ちゃんを褒めていた。

確かに亜佐美ちゃんは紗枝ちゃんがいたからいつも一番だったの
かもしれない。だけど、亜佐美ちゃんがやつたのはいけない事だと
思う。

それで、結局紗枝ちゃんにとつて償いになつたのかというとそ
うでもないと思う。紗枝ちゃんなら市の大会のほうも出ないと思うか
ら。

第一、亜佐美ちゃんは紗枝ちゃんに直接謝つて無いんじゃない
と私は思う。

大丈夫かなあ、紗枝ちゃん……

第三章 出来なかつた事　？（後書き）

今回は一つの章が長いので、一つに分けます。
更新をお楽しみに。

第三章 出来なかつた事 ？

「ただいま」

「お帰りなさい」

私は一時間目からずっと上の空で、いつの間にか家に帰宅してしまっていた。

母と上の空のまま適当に会話し、自分の部屋に行く。そして、自分でも名を書いたかも分からぬ宿題を終え、すぐに時間は経つていった。

「お～い。お姉ちゃん。『」飯だよ～』妹の声がし、はつとする。

時計を見ると六時半になつていた。

言われた通りに食卓へと向かい、『」飯を食べ始める。

「ねえ、お母さん」

「なあに？」

母は端を動かしながら聞く。

「紗枝ちゃん、風邪じやなかつたんだつて」

「やつぱり」

母は予想をしていたと言つよつに平然と答えた。

私は母に一時間目の事を話す。

「ふうん。でも、本当にそれだけなのかな？」

「何が」

こうしているときは妹は話に入つてこないから助かる。妹は何か食べているときは大事な事が無い限り、何も話さないのだ。

「いやあ。ただの勘なんだけどね。それ以外の理由に何かあるんじやないのかな、つて。何か心当たりは無いの？」

私は考えてみて、思い当たる節が一つだけあつた。だが、

「……特に無いなあ」

私はそれを母に言わない。

何か言われるような気がして怖かったのだ。自分のしていることについて何か言われるの嫌いだ。

「(i) 馳走様」

母が思いついたかのよつて言つ。

「宿題やつたの?」

「うん」

適当にやつた、何て事は言わない方が良いだつと悟つ、私は自分の部屋に戻つた。

理由。

私はそれに対し一つ思い当たる事があつた。
毎年、夏には水泳があつた。

私達は四年生だ。四年生は水泳で変化が起つる年である。
小学校三年生までは、膝丈ぐらいしかない水が入つてゐる小さなプールで水泳の授業行つのである。しかし、四年生になると、二十五メートルの大きなプールとなる。一番深いところでは百四十五センチの背が無いと立つ事は出来ない。

だが、当時の私は百四十五センチがあるかないかで、足がつくかどうかも微妙なところである。

さらに、私は泳ぐ事がお世辞にも上手とは言えなかつた為、おぼれてしまいそうになつたことが一回だけあつた。
それは私のことなので置いておくとしよう。

私と違い、紗枝ちゃんは水泳も出来る。おまけに、背も高いので足をついたとしてもおぼれる心配など皆無だ。その証拠に、紗枝ちゃんは二十五メートルのプールを楽に泳いでいた。

話は少し変わるが、水泳のプールのある場所と私達の教室は近くない。校舎一つ分は離れている。そのため、移動をしなければならない。

そして、その移動時間の時には紗枝ちゃんの周りには自然と人が集まつていた。私はそれを紗枝ちゃんを賞賛するためだつと思つて

いたし、それ自体は別に悪くはないと思っていた。そのため、私と紗枝ちゃんが一緒に行こうと約束をしていても、一緒に行けることは少なかつた。

そのうち、移動教室の時には紗枝ちゃんと距離を置こうとするようになつた。

それは水泳以外のときでも続いた。

私は水泳の移動教室以降、距離があるよつて感じた。

その距離はいつまで経つても埋まる事は無く、逆に段々とはなれていくよつう気がしてならなかつた。

それでも、私は休み時間に紗枝ちゃんと話したり、紗枝ちゃんと遊んだりもした。

そして、私が紗枝ちゃんととの心の距離を感じながらも話していた頃。

「でさ、妹が

「うん」

「

「とか言つてさ、生意氣……といつか、憎たらしいんだけど」

私は意気込んで拳を握り締める。

「うん」

紗枝ちゃんは私の話を聞いていても、無表情であいまいに頷くだけ。

「で、どうなつたの」

しばらく紗枝ちゃんの顔を見ていて考えていたため、話の途中で黙つた私を紗枝ちゃんは少しだけ見る。

「あれ？何を話していたつけ」

「忘れたの？妹の話だよ」

「……あ、そうか。それで

私は話しに戻り、一人で笑つた。

私は笑いながら考える。

嗚呼。もしかしたら、紗枝ちゃんは「んなにもつまらない話しきを聞いていたんだな。

それに、よくよく思い出すと私が一方的に話していただけのようで、紗枝ちゃんは何も話していないような気がする
私はそれを思つと自然に目を伏せていた。

嗚呼……。もしも、紗枝ちゃんが学校にこれなくなつた理由に、私の思つた事が入つていたら？

私はそれを思うと頭を抱えた。

「おーい。優花、お風呂！」

「お姉ちゃん。お風呂だつて」

私は妹の声だけが辛うじて聞こえた。

「お

「はいよー」

妹の声を途中でさえぎり、私はタンスから着替えを取り出し、風呂場へと向かつた。

風呂から出た私はぽかぽかと温まつた体になつていた。

そうしたら、すぐに眠気が襲つてきた。

いつもは風呂に入つてからは、逆に眠気が醒めるのだが、今日は違つた。

頭が疲れていたからだろ？

今日はもう寝よう……

私は大きな欠伸を漏らし、いつもよりも早めに寝床に着いた。

そして、持久走大会当口。

亜佐美ちゃんは学校には来なかつた。

もちろん、紗枝ちゃんも来ない。

私にとつての持久走大会はつまらない物に変わつた。
つまらない。

それが私の感情。

持久走大会が終わり、席に着く。

私はなんとなくクラスを見渡した。

私は紗枝ちゃんがもうこのクラスに戻つてこないような気がした。

クラスの皆は、楽しそうに何か話している。

私は他の人と関わろうともしなかつた。

ああ。如何してこんな事になつてしまつたのだろうか

第四章 つまらない日々

第四章 つまらない日々

「そりいえば、お前つていつも独りでいるのな」

「……まあね」

何気ない男子の一言。

私にはその言葉が突き刺さつたが、決して相手は悪気があるわけでも無い。

「……といつか、読書する時間も増えてるような気がするけど?」

「最近、読書に田覚めたんだよ。といつか、余計なお世話だよ。東くん」

「ふうん」

ちょっとと顔を曇らせた東くんだが、その後に短い会話をする。

そのあと、東くんは自分と仲がいい男子一人、石田くんと佐津間くんのところに行ってしまった。

今の中にはその三人しか友達といつても良い人がいない。

持久走大会があつてから、紗枝ちゃんはクラスに戻ってきていい。それどころか学校にすら来ていなかつた。

それに対して、亜佐美ちゃんは持久走大会が終わつてから、何食わぬ顔で学校に来ていた。

私はそれを思つと、そんをしたのは紗枝ちゃんだけなのではないかと考へた。

亜佐美ちゃんは経つた一回だけ持久走大会に出ることができなかつただけだ。

じゃあ、紗枝ちゃんは?

紗枝ちゃんは一回だけで済むの?

あれから何ヶ月も学校に来ることさえもできていないのに、来年の持久走大会なんて参加する事ができるの?

私は出来ないと予想する。

元々、私が転校してきた頃から不登校気味だった。それがまたはじまってしまった。

それが来年までに回復する事ができるのか、そう言わると、その可能性はきわめて低いだろつ。

思わずため息が出た。

私は今読書中。

もちろん、独りで。

紗枝ちゃんがいなくなつてから、私は女子の友達がいないも同然だった。

私は学校生活で紗枝ちゃんとし関わりを持つていなかつた事を嫌でも思い知つた。

私ははつきり言つて友達を作る事は苦手な物でしかない。
おまけに、人と関わる事すら上手ではなくなつた。

だから私は独り。

紗枝ちゃんがいなくなつてから、私は声をかけられるわけでもなく、声をかけるわけでもなかつた。

紗枝ちゃんといった頃は話しかけてくれる人もいたのに。それは、紗枝ちゃんが目当てだつたということだろうか。

そして、私に話し掛けて来てくれるのは数少ない三人の男子だけ。それでも、会話は少ない。

そして、男子と話していくと思うのだ。

ああ、男子といるのはらうだなあ。何も考えなくていい。裏表が無い。

何かあつたらキッパリ言つてくれる。

はつきり言つてまどろっこしい女子は嫌いだ。

そして、それを言い訳にして自分から足を踏み出さない自分が恨めしい。

別に読書をしていれば休み時間はどうにかなる。

だが、時々考えるのだ。私はこのクラスに必要とされていないの

ではないか、と。

私がいなくなつた所でこのクラスで困る事はさほど無いと思つ。リーダー性があるわけでもなく、人気があるわけでもない。そんな自分がいなくなつたとしても困る人は少人数だろう。それらを思うとどうしても気が重くなる。

私は窓のほうを見た。

私の心を表すかのように、灰色の薄暗い雲が空に漂つている。おまけに、雨まで降りそうだった。

そういえば、天気予報は雨つて言つてたな。

私は再び思いため息をついた。

本当につまらない。

もし、紗枝ちゃんが戻つてくれたとしても、このつまらない日々を変えてくれるのだろうか。

私はつまらない日々を過ぎしながらもいつの間にか、五年生になつてしまっていた。

紗枝ちゃんは結局、四年生の間に学校に来たのは両手で数えられるほどの回数しか来ていなかつた。

学校に来たことはあっても、クラスに戻つてくる事はなかつた。

そして、今に至る。

五年生の時にはクラス替えがある。そのクラス替えは結構に重要である。

五年生のクラスのまま、六年生になるのだ。そのため、五年生のクラスではいい人がそろつているといいな、とは思つていた。

だが、その願いはことごとく打ち破られる羽目になつた。

四年生の終業式の日にクラス分けの用紙がもらえるのだが、その用紙を見て頭を抱えた。

なんとなく……えちゃんととは離れるだらつとは思つてたよ。

それはいい。なんとなくそう思つていたから。だけど……三十三人中同じクラスになつたことがある人が六人しかいない。

しかもあまり話さない人のほうが多いし。

あ、でも、石田くんと東くん、佐津間くんが一緒にだからまだ良いか。

あまり良いメンバーとはいえないが、わざと明るい方に考えようとした。

そして、しばらくしてから紗枝ちゃんのクラスのほうを見ると、私の思う良い人が集まっていた。
やっぱり、紗枝ちゃんのクラスはいい人ばかりだなあ。
ため息をつかずにはいられなかつた。

「はあ……」

新しく五年生になつて十日が過ぎたが、私はいまだに独りでいた。五年生になり環境が悪くなつたとしか言いようが無かつた。

殆んどが同じクラスになつたことの無い子ばかり。同じクラスになつたことがある人でも、あまり話した事の無い子ばかりだつた。こんなにもつまらない生活。いつまでこんな生活続くんだろう。私はこういう事を考えると、どうも寂しさを思うようである。そんな事を思うのは毎日だら言つのに、いまだに慣れていない。

ああ、本当にいつまで続くのだろう。

そして、五年生になつて一ヶ月が過ぎた頃。
ようやく紗枝ちゃんが学校に来るようになつた。それも、毎日学校には来れているようである。

それは、大きな進歩であつた。

四年生の時には極僅かしか学校にくる事が出来ていなかつたのだから。

だが、例えクラスが変わつたとしても教室に行く事はできていな
いようであつた。

私は寂しさを紛らわせたかったのか、毎日のようだ紗枝ちゃんに
会いに行つていた。

紗枝ちゃんがいるのは職員室の隣にある小会議室。

私は暇さえあれば紗枝ちゃんの元に行っていた。

そのときは忘れてしまっていたのだろうか。

自分が紗枝ちゃんを傷付けてしまったかもしないと言つ事を。

私はそれを思つて更に思うのだ。

私はそれを忘れるほど、教室から逃げ出したかったのだろうか、

と。

第五章 相談

第五章 相談

私は毎日のように紗枝ちゃんのところへ通い続けた。
そんなるある日の事。

「いいなあ。紗枝ちゃんは」

「なにが？」

「だつてさあ、教室に行かなくてもいいじゃん」

私は言つてから自分の愚かさに気づく。

しました。学校に行きたくないのがバレバレじゃん。

それに、本当は紗枝ちゃんは普通に学校に通いたいのかかもしれないのに！！

「もしかして教室に行きたくないの？」

「……まあね。息苦しいし」

「私は平然を保つようにしながら言つ。

「ねえ、それならさあ。もう教室に行かないでここにいればいいじ
やん」

「え？」

「私みたいに教室に行かなくてもいいよ？」

「……それは悪魔の囁きだつた。

私は黙り込む。

確かに……ね。

そうすれば私は楽になるかもしれない。

でも、親がそんな事を許すの？

親が許すのならば、私はその囁きに乗つてしまつていただらう。

だが、私の親がそんな事を許すはずが無いのだ。

「……あ

私は小会議室にある時計を見て声を漏らす。

「やっぱ。あと少しで休み時間終わっちゃうよ…じゃあね」

私は紗枝ちゃんに軽く手を振り、小会議室をあとにした。

私は本当に教室という場所が嫌だった。

他に一人でいる人はいない。

自分が独りでいる事が恥ずかしくて、独りでいるのが嫌でしょうがなかつた。

そうだ。私は嫌なんだよ、ここが。

社会の授業をしている先生をぼうつと見ながら私は思う。

……明日、先生にでも話してみようか。

そして、明日。

私は先生に短い手紙を渡した。

指定した場所は職員室の隣にある小会議室。

私はランドセルもそこにおいて先生を待つた。

もうここには紗枝ちゃんもいる。

そして、しな樂すると先生は現れた。

「ゆうかさん、ちょっときてください」

「はい。じゃあね」

私はランドセルを持ち、紗枝ちゃんに軽く手を振った。

教室に向かうまで、先生と私は無言のままだつた。

そして、教室にランドセルを置いてくるように言われ、黙つてそれに従う。

廊下にいる先生に手招きをされ、廊下へと向かう。

それと入れ替わつて先生は教室の皆さんに言った。

「それでは、朝の歌を歌つていてください」

クラス中に聞こえる大きな声で言つた伝えた先生がすぐに戻つてきた。

先生は扉を閉める。

だが、クラスの中で合唱に対しての呼びかけは廊下にまで聞こえ

た。

「……ところで、あの手紙を読むと、貴方は学校に帰宅無いようだ
けど?」

「はい……」

先生は私の学校での様子を見て理由なんて分つてるんでしょう?
でも、貴方が学校に来なくなつて、もう一度学校に来たくなつた
とき、貴方はここに戻つてくる事ができるの?」

「……」

それは……たぶん無理だろ?。

それで、紗枝ちゃんはクラスに戻つてくる事ができなくなつてい
るのだから。

「紗枝ちゃんもそうだけど……」このクラスにもいるでしょう? 不登
校の子が。あの子は、教室に戻つてきたときに注目でもされるんじ
やないかと思つて怖がつて学校に来る事が出来ていよいよ
私は確かにそんな封にはなりたくない。でも……。

先生は私が何を考えているのか分かったのだろうか、

「今の優花さんには教室での居場所は無いのかも知れない。なら、
不登校になるのなら、それを見つけてからにしない?」

「……はい」

先生は小さく頷き教室に入るように促した。

私は自分の席へと向かう。

皆が歌を歌つてゐる中、私は教科書をしまつたりしてゐた。

私はそれで注目を浴びてゐる事に気づかない。涙をこらえる事で
精一杯だった。

先生の言つた事なんて、そんな物、頭の中では理解いていたさ。
でも、それが出来ないから私は困つてゐるんだよ。

こらえていた涙が私の頬を流れる。私はあわてて持つてゐた教科
書で顔を隠し、見られないように涙を拭つた。

だが、隣の席の子には見られてしまつたようである。ちょっと驚
いた顔をしている。

私はロッカーへと鞄をしまい。

席へと向かい何事もなかつたかのようにうつたい始めた。だが、いつもより声はかすれていたのかもしない。

そして、朝の会が終わると隣の席の子に声をかけられた。

「……お前、何かあつたのか？」

やはり、泣いていたのはばれていたらしい。

「別に何も無いよ？」

少し赤くなつた目で私は言つて、笑顔で首をかしげた。今の言葉には説得力など全くなかつたかもしぬないが、私の顔を見て少し間を空けたが、

「そうか」

短くそう言つた彼は、すぐにどこかへと消え去つた。

もう、いいや。何でも。

先生に助言をもらつても何もいえない私。

居場所を見つける……か。

そのためには紗枝ちゃんの元へもあまり行かない方がいいのかもしない。

ううん。

それはたぶん無理だ。

今の私には紗枝ちゃんにしか縋る相手がいないのだから。

そして、それから何ヶ月もの時が過ぎたが、結局私は変わらなかつた。

ただ、「独り」で読書をするだけ。

「独り」という寂しさを感じながら。

第六章　運動会

第六章　運動会

私の通っている小学校では運動会は五月の中旬に行われる。私にとつては運動会は年間行事の中で一番目に嫌いな物だった。とにかく、運動をする行事は嫌いなのだ。

そして、五年生の運動会はなんとなく始まり、いつの間にか終わってしまった。

そして、あつという間に時は過ぎ、今は六年生である。五年生はつまらない日々を毎日過ごし、いつの間にか終わってしまった。

先生からの助言をもらつてから、私は何も変わらなかつた。

本当につまらない。

六年生になつてもつまらない日々は続いた。

そして、六年生になつてから、約一ヶ月経つた。

それは、運動会の練習シーズンに入った事も意味する。

六年生の定番といえば、組体操である。

私はとにかくそれが嫌だつた。

高い所は嫌いだし、ピラミッドなど下になつてはとても支えきれないような気がした。

そして、その予想は見ごろに的中する事となる。

だが、その前に組み体操という定番の物を差し引いて、六年生の競技では名前は忘れてしまったが興味深い競技があった。

その競技の内容は、色々な職業を運動会にちなんでそれになりきり、走つてリレーをするといったようなものだつた。

救急隊員ならば、担架で人に似せた物を置いて運んだり、主婦だつたら少し重い買い物袋を持つたりするといったようあものだつた。

もちろん他にも選択肢はある。

そして、私はその運動会の競技では料理人になりたかった。その内容はお玉にピンポン玉を入れて運ぶといった、地味な物だった。私は目立つためにやるわけではないので、これでいいと思つていた。それに、運動神経が悪い私にぴったりだったのだ。

さらに、私は四組だったのだが、他のクラスの話を聞いていると料理人はきわめて人気が無いらしいと聞いてこの競技に出ようと思つたのだ。

だが、他のクラスとは違つたらしい。

私はその料理人に立候補したのだが、私のほかにもう一人いた。

一人は特別学級の女の子で、もう一人が少し障害を持つているが特別教室に行くほどでは無い子だった。

私はこの二人なら、私が料理人になれると思っていたが、考えが甘かつた。

私はその二人よりははるかに上手に出来ていた。

だが、五年生から掛け持ちで同じ担任の先生は私を料理人からはずさせようとした。

違うのもやつてみたら、と勧めて、私に料理人の練習をさせないようにしてきた。

だが、それはそう長くも続かず、先生に廊下に呼ばれた。

「優花さん。貴方は料理人を辞めて、夫婦になつてくれないかしら

？」

「え？」

私は小さく首をかしげる。

「夫婦は二人組みで縄跳びをして言つて進んでいく物なのだけど、一人足りないのよ。だから、お願ひしてもいいかしら」

「…………」

そういうわれても何を言わない私を見て先生は困った顔をしてから言つた。

「……それとね、もう一つあるのだけど、特別学級の子も、もうひとりの豊田君も、料理人ぐらいしか出来ないのよ……。だから……貴方は夫婦の方に変わつてもらつてもいいかしら?」

「……はい……」

私は顔を伏せる。

先生は申し訳なさそうな声で最後に、

「じゃあ、松村さんと一緒にペアを組んでね。……じゃあ、教室に戻つてもいいわよ」

「はい……」

私は小さい声で曖昧に返事をし、教室の中へと入つて行つた。

ああ……。選択する物を間違えていたかもしだれないな。

寝床に入つた直後、私はその事を思った。

しかも、変わつた物が夫婦なんて……

確かに夫婦つて、エプロンを着て、縄跳びを飛びながら五十メートル走るやつだろ?

運動神経も悪いし、協調性の無い私がそんな物をやらないといけないなんて。

恥をかくだけだし、私と組むペアの松村さんが可愛そうだ。

その前に、如何して私が料理人をやめなければいけないんだ?

……分つてるよ、理屈では。

私のほうが上手に出来るけれど、あの二人は料理人のようなものしか出来ないから、譲つてやつてくれ、といつてはいるんだろう?

でも……それで私が納得するとでも思つてはいるのか?

私が……私がどれだけ料理人をやりたいと思つてはいたと思うのだ。恥をかくことも泣く、皆に迷惑をかけるわけでもない。地味で目立つ事もなくて、私にあつてはいたというのに……。

私はそれを思うと、急に視界がぼやけ始め、なるべく音を殺して静かに泣いた。

隣には寝ている妹がいるし、隣の部屋には両親がいるのだ。

こんな事で泣いているなんて気付かれたくもなかつた。

「じゃあ、松村さんと練習をしてね」

「はい……」

松村さんは若干困った顔をしている。

私と松村さんは、私にどうしては無理やりペアを組まされたのだ。
私は全く納得がいっていない。

……確かに松村さんは、私にあつたグループの一人だつたような気がする。確かに、大人しめのグループだつたはずだ。

それにしても、そんなにも私とペアを組むのが嫌なのか？何をそんなにも困った顔をしているんだ。

それとも、ただしゃべつた事の無い地味な私とどのような会話をしているのか分かっていないだけか？

どちらにしろ、私がとてもなく機嫌が悪い事を知つていてくれないと困る。

「じゃ、じゃあ、練習しようか」

何か怯えたように言い、私は練習を始めた。
初めて見ると早いものである。

案外、すぐに授業の終わりのチャイムはなつた。
私と松村さんはかなり速く縄跳びで走れるようになつた。
独自の跳び方しかできない私にあわせてくれているため、うまく言つたのである。

「意外と出来たね、松村さん」

「……ねえ。松村さんじゃなくて、いつちゃん、って呼んでくれない？」

「いつちゃん？」

私は小さく首をかしげる。

「うん。伊織だから、いつちゃん」

「……わかつた。いいよ」

私は無表情でそう言つ。

「いつちゃん、早く行くよー」

いつちゃんは仲良しのグループの子に呼ばれて、

「はーい。じゃあね」

そう言つて私に手を振り、すぐに走り去つてしまつた。

「あつ……」

私はいつちゃんを引き止めるかのよつこ、いつちゃんに向けて手を向けたが、虚しく空を切つた。

虫が良すぎる……か。

今日、初めて喋つたのに。いきなり、いつちゃんいるグループに入れてくれなんて。

私は運動場のど真ん中で足を止める。

そして、俯いた。

……如何すれば……、いいのかなあ。

私は俯いたまま、独りでとぼとぼと教室に向かつた。

そして、結局の所私は夫婦をやる事になつてしまつた。

だが、この運動会のおかげで、私はいつちゃんたちのグループに入るきつかけにする事ができた。

もう一つ、今年の運動会でいやな事がある。

それは組体操だった。

私は小柄で、上のほうに乗るのが向いている人である。

だが、私は残念のことにはい所が苦手である。

そこで、だ。

組体操といえば、二人組みでやるやつもある。

そのため、私はクラスの中あぶれてしまうのだ。

だが、この運動会のおかげでグループに入る事ができたため、その心配は無い。

だが、私のいた小学校では肩車とサボテンといつ二人技があつた。

その二人技をするのは、私が一年生のときに転校してきてからずっと一緒にクラスだった小泉さんとのペアだった。

小泉さんは、とても大人しくはたから見ればとても大人っぽく見える。私は殆んどさえちゃんといたため、小泉さんは殆んど話した事がなかつた。

そのため、迷惑をかけるような気がしてならなかつたのだ。

そして、私はいきなり迷惑をかける事となる。

「こら、優花さん。そんなにもへつぴり腰にならないの」

「ふえ」

私はなんとも情け無い声を出す。

私と小泉さんは肩車の練習をしている途中だつた。

私は小泉さんの肩の上に乗り、へつぴり腰の状態になつている真つ最中だつた。

「ちょっと、とりあえず下してあげなさい」

小泉さんはかがんで、私を下に下す。

「…………。『めんなさい。小泉さん』

「いいつていいつて」

小泉さんは私に声をかける前までは少し不機嫌そうな顔をしていたが、私に声を掛けられると笑顔になつてそういう。やつぱり……、迷惑かけてるよね。

私は何気に肩を落とす。

「そんなんにも落ちこまなくて大丈夫だつて。私ちゃんと支えてあげるから安心して」

「それじゃあ、もう一回」

先生がそう言って私は小泉さんの肩に乗る。

「あ、そうそう。そんな感じ」

私は小泉さんに言われた後は、何故か楽になつた。

そのため、足の震えはまつたく止まつていながら、何とかへつぴり腰にはならないですんだ。

そして、なんとか一時間の練習中に肩車を出来るようになつた。

「ありがとう、小泉さん」

「…………ねえ、小泉さんじゃなくていいよ。下の名前は杏子だから、

なるべく前の名前で呼んで」

「うふ……じゃあ、京子ちゃんは？」

「うへん。『ちゃん』はなくともいいんだけど……。うん、それで

いいよ」

「わかった。今度からちゃんと呼ぶね

「はい

私と京子ちゃんは無言で歩き、じまじまくすりとグループの子達がやつてきて、再び会話が生まれる。

……いつこの会話をしたのも、本当に久しぶりだな。
これからは、この子達といればいいんだ。

これで……これで、「独り」から逃れる事ができる。

私は心中で本当に喜んでいた。

孤独から抜け出す事ができるのを。

そして、「独り」から抜け出す事ができた私は、運動会を成功させる事ができた。

組体操も、何の事故もなく怪我も無く、技を成功させたのもで
きた。

結局、イヤイヤやり始めた夫婦でも、最終的にはうまく出来た。
それに、この運動会で夫婦に私がなつていなかつたら、「独り」
という呪縛から抜け出す事は出来なかつたと思つた。

第七章 友達

第七章 友達

「……ねえ。私達、小泉さんと藤崎さんに避けられてるよね」

「そう……だ……ね」

私は自分のことだというのに曖昧に返事をする。

私はいつちゃんと一緒に家路に着こうとしている所だった。

私はそう話をしていたとき、なんと答えればいいのか分らなかつた。

私はそんな風に話を始めたことは無い。

免疫が無かつた方だろうか、曖昧な返事をしてしまつたのだろう。しばらく私たちは無言で歩く。

私はその間に考えていた。

私はいつちゃんと一緒にいる事をえ出来れば、別にそれでもいいとさえ思つていた。だが、いつちゃんは違つた事がよくわかつた。

そう思う事も、これで何度もかになる。

私は自分でも思うのだ。

私とて何が楽しいのだろう、と。

私は正直を言つと、いつちゃんと同じグループについて、何が楽しいのだろう、と。

私は時代遅れだし、テレビや雑誌なんかも見ていない。そのため、私は話題に入る事は困難である。

私が今日があるのは小説や漫画といった話が描かれている物だけ。それなのに、私のいるグループには読書好きが独りもいない。それどころか、クラスにもいないぐらいだ。

そのため、自分から話題をふるのもできないのである。その事に気づいていたが、私は話題を取り入れるために知識を取り入れようとする事は無かつた。

もしかしたら、そこらへんの会話でもいいのかもしない。だが、私は紗枝ちゃんのことが会つて以来、妙に意識して何も話せなくなつてしまっていたのかもしない。

それが一番の大きな原因だと私は思った。
私は話題が触れない事から、私はグループに入つていながらも何故か浮いていた。

そんな事を考えていると、

「……優花ちゃん？」

私は会話も無いまま、進んであり、そんな事を考えてしまつたため、いつの間にかいつちゃんと分かれるところまでできてしまつていた。

おまけに、曲がる所の先まで規定し待つていた。

「あ……、じゃあね！」

私はいつちゃんに手を振つたが、いつちゃんはそれに対しても返してくれなかつた。

そして、今回の件を通して私は思つたのだ。

私はいつちゃんに迷惑をかけていたんだな……、と。

Hピローグ 1 車内で

Hピローグ 1 車内で

私は今車の中にはいる。

運転は父がしている。助手席に母。そして、後部座席の運転手側には私の妹、助手席側には私が乗っている。

「車がいつもより重い！！」

私が車に乗り始めて何度も言つたせりふをもう一度言つてほやいた。

後部座席の後ろにある荷物入れには沢山の物が乗っていた。車が重くても無理は無いだろう。

今は高速道路を走っている。そのため、車の走る速度は百キロほど出でていた。

どうしてこんな状態になつているのかといつと、私達家族は引越しをする事になつたのだ。

そして、車でその場へと向かつている最中である。

引越し先は祖父母の家だった。

私が引越しをする事は、六年生の始め「口から決まつていた。

高校に行つてから高校を変えようとすると、その高校からもう一ランクしたの高校に行かなればならないためである。それに、引越しをするのも面倒だらうと、祖父母の家に住んでその場に留まるうとしたわけである。

「……本当にこれで良かったのかなあ

父は心配そうな声を出しながら、また何度もかのこの台詞を言つ。

「さあ？」

母は父の問い合わせに答える。少し間をおいてから答える。

私と妹は父の問い合わせに答える。何も答えない。

私は高速道路から見える景色を見ていた。

曇り空で、空の下にある淡い桃色をした桜並木も暗い。

私は考えた。

父が何度も行つた、「こいで本当に良かつたのか」に対しての答え。私はそのままに答えた。

私の答えは「分らない」のままだった。

私がいなくなつて、あの小学校……もしくは中学校で困る事は無いだろう。それに、いっちゃんにも迷惑は掛からない。

私のいたグループではお別れ会をしてくれた。そのときには、嬉しくも悲しくもなかつた。

本当は中の良かつた子達とはなれることは悲しい事だとは思うのだが、私は引越しにも慣れてしまつてなんとも思わなかつた。

それは、引越しに慣れてしまつていたこともあるだらうが、わたしはもう一つの理由を見つけ出した。

それは、そのグループの子達との別れが、自分にとつてその程度のものだつたということだ。

いくらなんでも、折角築けた仲だというのに、分かれてしまつのは惜しいような気がした。

だが、私はそれ以外については何も思わなかつた。

それは、私が求めていたものがその程度だつたという事を表してもいた。

そして、私は思うのだ。

もしかしたら、この引越しは悪いことではなかつたのかもしけない。

だと。

だがどれは、その引越し先での生活にもよるかもしえない。

そのため、容易に答えを出す事は不可能なのだ。

私は不意に思った。

私は小学校一年生から小学校六年生までの、五年間を過ごしたこの地で何が思い出に残つた

のか、と。

私は思い出を思い出してもみるが、何一つ良い思い出は思出す事が出来なかつた。

私が思い出せるものには良い思いでなんて皆無だつた。
私が辛うじて思い出せたのは、「独り」という寂しさを感じながら過ごしてきた学校生活のみ

だつた。

他にも、良い思いでといえば宿泊研修なのだが、全く思い出せなかつた。その当時は良い思い出になると想つていたと思うのだが、今となつては全く思い出せなかつた。

それほどに、「独り」という寂しさの思い出のほうが勝つていたのだろう。

私は大きな欠伸を漏らす。

私は引越し先のことについて考えた。

私には不安は無かつた。

とはいゝ、安心も無い。

何もかもが無関心だつた。

私は「独り」を乗り越える事ができたのだから、何があつても大丈夫なような気がしていた
のだと、私は思う。

そして、諦めを持つていたのかもしれない。

私は無邪気に友達と話し、笑い、楽しむことが出来たあの頃には戻れないといふことを悟りはじめたときから。

ハルク 1 車内で（後書き）

これにて第一章 小学校時代 は完結となります。

第二章も更新していく予定です。

早い区切りではありますが、暗いだけといつても過言ではないお話
は第一章で終わる事となります。

それでは、更新をお楽しみください。

第九章 新しい地

第九章 新しい地

私は引越しをした。

そして、今は祖父母の家をリフォームした家に住んでいる。

私はこの春から中学一年生になった。

中学校の説明を一切受けないまま、私は入学式を終えた。

そして、私は一年一組である事が分かつた。

転校してきたこの学校では、驚くべき事に一クラスしかない。

今まで、四クラスだったの驚いた。

私はそんな事を思いながらも、一年一組の教室へと向かう。

私は担任の先生の細かい説明を真面目に聞き、休み時間を迎える。中学校の皆は、小学校の人がそのまま上がってきたので顔は皆知つているらしく、話弾んでいる。

私はその輪の中に入り込めずにいた。

転校生がきたのはただらしく、私はクラスの中でそれなりに浮いていた。

そして、私は読書をするための本を持っていなかつたため、仕方が無く肯定のほうを見た。

校庭は小さく、その前には国旗もある。

その南にはさくらが五本ほど立ち並んでおり、美しく咲き誇っていた。

私はそんな事を考えながらも、ため息をついた。

また……、私は「独り」か。

私は、校庭の方を向いて顔を伏せる。そうしていた時、

「……あの、貴方つて、転校生だよね?」

「あ、うん」

不意を疲れて、私は返事に戸惑つた。

振り返ると一人の女子がいた。

獨りは背の高い小太りのショートカットの子。もう一人は癖毛で背丈は高くも泣く低くも無い子だつた。

「名前、なんていうの?」

「西垣……優花だけ?」

我ながらぱつとしない返事である。

「そうなんだ!私の名前は毛利紗智子」

背の高い方の女の子は元気よくそういつた。それに続いて、

「……私は棚橋晴菜。宜しくね」

もう一人の子は不安そうに微笑みながらそついた。

「じゃあ、宜しくね」

私も自然と顔が綻んだ。

今日は決して良い振出とはいえなかつたかもしれないが、私には十分な事だつた。

そして、私は紗智子ちゃんと晴菜ちゃんで休み時間を過ごしていった。そして、私が転校してきてから数週間が経つた頃、「ねえ、皆さあ、『さつちゃん』つて呼んでるから今度からそう呼んでよ」

「あ……なら、私も『晴ちゃん』つて読んでよ」

「ん……、ならそう呼ぶよ」

「「うん」」

二人は同時にそう言って顔を見合せた。

そして、私は小さく笑い、二人もつられて笑つた。

第十章 晴ちゃん

第十章 晴ちゃん

私は学校生活の殆どさつちゃんと晴ちゃんで時間を過ごしていた。

だが、それはすぐに崩れる事になる。

それは、私が中学生になつてから一ヶ月が過ぎたときだった。

「ねえ、晴ちゃん、てうぞくない？」

「えっ？」

私は小さく首をかしげる。

私とさつちゃんは家路に着く所としていたときだった。

晴ちゃんとは地区が違つたため、晴ちゃんはここにはいない。

「いや……だつてさあ。なんかうじうじしてゐるし、それにつま『

如何しよつ』とか言つてゐるじやん？」

「まあ……確かに、ね」

「でしょ？ それで

私はさつちゃんの言つた事について考えてみた。

確かにさつちゃんの言つている事は間違つてはいない。

だが、私はそんな事を思つた事はなかつた。

私はこの人はこういう性格をしているから、こういう風に接しればいいなど考へてゐる。そのため、性格について悪い所があつても、

その性格について何も思わなかつた。

よくよく考へると、それはその人に対しても、ただ付き合つていたからではないかと今になつては思つた。

そのためなのだろうか。

私は人と接していく、小さい事なら喜んだり、怒りがわいてきたりもしない。

それは、もしかしたら、こつ之間にか感情の一部がすつぽりと抜

けてしまっていたのかもしれない。

だが、それがいつ抜けてしまったのか、分かつてもいない。

そんな事を考えていると、いつの間にかさつちやんと別れていた。その間には、さつちやんが晴ちゃんに対する愚痴を言っていた事だけは覚えている。

そして、もう一つ覚えている事があり、別れ際さつちやんが言ったのだ。

「それでさあ、じつちかとこうど、私は晴ちゃんと関わりたくないんだよね。だから、私晴ちゃんに明日言おうと思つんだ」

「何を?」

「『『もつ、貴方と関わりたくないから、もつ関わらない』』…』」

私は少しだけ目を瞬ぐ。

「そんなにはつきり言つんだ」

「嘘、そんなもんだよ」

さつちやんはさも当たり前のよつこ言つ。

「そんじや、明日ね」

さつちやんは、私に向かって大きく手を振り、横断歩道を渡つていった。私はさつちやんに向かって小さく手を振つた。

そして、翌日。

さつちやんは私に予告してこた通り、晴ちゃんに昨日書いた事をそのまま言つた。

すると、

「うん……、そりなんだ」

「だから、これから私たちともつ関わらないでくれる。」

「う……ん」

晴ちゃんは私たちのほうを見ずに、顔を伏せながら言つた。

それで数秒経ち納得したのか、さつちやんは、

「行」

私の腕を軽く引っ張つて、教室の中へと導く。

私は教室に入る直前、廊下にいる晴ちゃんのほうを見た。晴ちゃんは顔を伏せ、両手を静かに握り締めていた。

「ああ、私はさつちゃんに従つていただけだった。」

さつちゃんが愚痴を言つているとき、何か言つてやればこんな事にはならなかつたのだろうか。

私は教室の入り口でそんな事を思つた。

「優花ちゃん？」

さつちゃんが教室の中で首をかしげている。

「ああ、ごめん。なんでもないよ」

わたしはそつ言つて教室に入つていつた。

私達はその後、結局晴ちゃんとすゞす事は無かつた。私は晴ちゃんが嫌いではなかつた。

そのためか、別れを告げてからも、晴ちゃんを田で追い、何をしているのか、と様子を見ることもあつた。だが、それも一ヶ月ほど過ぎた頃に早めてしまつていた。そして、私は思つのだつた。

私は自分さえ良ければ、他は何でも良い人なんだな、と。

第十一章 クラス替え

第十一章 クラス替え

私はさつちゃんとのグループと適当に付き合い、変わらない日々が続いていた。ついには、そのまま中学一年生になってしまっていた。

クラス替えが会った日。

「うつ わ、 最悪」

さつちゃんが割と大きな声で言ひ。

私は自分がどのクラスか見ながら言ひ。たつたの二クラスしかないのだが。

「だつて…… 担任が」

私はさつちゃんの指差したクラスを見る。すると、そこには構内ではあまり評判の良くない先生が担任になっていた。

「あ…… 残念だつたね」

私はやつと自分のクラスがどこだか分かつた私は、誰と同じクラスを探す。

つるる、さつちゃんと奥村さんは同じクラスでない事がわかつた。うわ……さつちゃんと奥村さんがはなれちゃうのは痛いなあ……。そして、中村さんと西郷さんが同じクラスになつていた。どうせなら、さつちゃんと奥村さんは一緒にクラスが良かつたなあ……。

まあ、何とかなる……かな?

私は先の事を考え、なるべく良い方向に考えようとした。

第十三章 体育大会

第十三章 体育大会

中学二年生となり、かなりのときが過ぎていった頃。

私はそれまでは何の心配も無く、さつちゃんのグループにいる事が出来ていた。

そして、一番初めの大きな行事である体育大会が九月にはあるのだ。

その体育大会により、私に代わらない日々は、変わる事になるのだが、そのときの私はまだそんな事を知る由も無かった。

「ねえ。貴女、自分が間違えている事に気づかないの？」

「はい……」

私は三年生の先輩に怒鳴られていた。

「じゃあ、やり方がわからないの！？」

「いいえ……、わかつてます」

「それじゃあ、ちゃんとやってよ！！」

そう言つて、先輩は自分の持ち場に戻つていく。

私は体育大会の応援合戦の最中である。

そして、私は間違いを多くしていて、怒られたばかりである。

体育大会まで残り一日しかないので、先輩も切羽詰つているのだろう。

そんな中、ふりを間違える私は、ただ足を引っ張つてはいるだけだった。

そして、私は結局その場で応援合戦を成功させることができなかつた。

そして、体育大会当日。

私はその後、先輩にできなかつた事を謝りに言つたが「そんな風にヘラヘラ綿割れて言われても、心がこもつていない」といわれてにらまれて終わつてしまつた。

そのときは場所も悪かつた。

あんなにも人がいる前で言つのが間違つた。

私を見下すような目で見て、心無い噂を流されるのも嫌だつた。実際にそつだつたからだ。

私を見る男子は、半分からかい半分本氣で「お前、先輩に謝つてこいよ」と言つたのだから。それが、本氣で言つていたならば、私はもう少しましに謝れたと思う。

私も分かつていたんだ。

笑つたりするなんて言つ事は、悪い事だと。

それでも、笑つてしまつたのは私が弱かつたからだ。

私は同じような過ちを繰り返そつとしている。

そして、私は思つのだつた。

なんとしても、応援合戦を成功させないと、と。その願いは半分成功し、半分失敗する事になる。

いよいよ、応援合戦が始まつた。

あ、間違えた！！

私が間違えやすいところで真つ先に間違える事となる。隣の女子が小声で、

「もう、何やつてんの！－」

と言つた。

私だつて、間違えたくて間違えているわけじやないさ。

また、何か言われるだらうな……

私は憂鬱な気分になつた。

その後、私は思つていたとおりに、周りの人に色々と言われる羽目になる。

中には「応援合戦の一回戦じゃ頑張ろ!...」と言ってくれた子もいたが、内心では如何思っているのだろうと思つ。

そして、一回戦。

今度こそは、何も間違えないようにする事ができた。すると一回戦でいつた子が、また小声で、「良かつたじやん!...」

と言つてくれた。

私は小さく頷いた。

私は成功をさせる事が出来て心のそこから安堵した。これで、何も言われなくて済むと。

そして、体育大会は幕を閉じた。

結果は応援合戦は私のいる赤組係、総合でも赤組が勝つ事になった。

私は再び安堵する。

これで赤組が負けていたら、また何か言われるからよかつたと思ったのだった。

そして、まだこの時の私は知らなかつた。

この体育大会が、変わらない、またつまらない日々を帰ることになる事を。

第十四話 再び

第十四章 再び

「ちょっと、はやくいこよ

「う、うん」

え？

中村さんと西郷さんは、私を置いて何処かへと行ってしまった。移動教室に行こうとしていた所を、私は置いていかれたのだ。

……まあ、いいや。

私は軽くそう思い、移動教室へと向かう。

それがはじまつたのは、体育大会が終わつて一日が過ぎた頃だつた。

移動教室のたびに裂けられている気がしてならない。

それどころか、普通の会話のときでも私に話をふつてくれないようになつた。それは私から話す事が少なかつたから氣のせいかもしれなかつた。

だが、そうは思えなかつた。

そして、私は気付けていなかつたのだ。

体育大会が原因だと言つ事に。

そして、それから一週間が経過した頃。それは、十月ぐらいの事だつた。

私は裂けられつつある中で、さつちゃんと一緒に帰つていた。

「どうしよう。帰つてくるとき同じなに」

「大丈夫だつて、私も着いてるから」

そう言つていたのはさつちゃんと西郷さんだつた。

私は体操服から制服へと着替えていた途中で、その話を聞いてため息をついた。

私のことか。

着替え終わって、部活動の終わりの挨拶をする。

そして、いつもなら帰ろうとする所なのだが、今日はその場で留まる事となる。

さつちゃんがそこで足を止めたのだ。

「今日の部活大変だったね~」

と、さりげなく言ってみると、さつちゃんからの返事は無い。それどころか、私から田をそらすためか、雨がボソリボソリと降っている空を見上げている。

私から何か言つても、これは無駄だな、と直感する。

今はさつちゃんと私だけだ。

西郷さんは違う部活の中村さんを呼びに言つている。恐らく何も知らないと思われる、同じ部活の奥村さんはもう帰ってしまった。そして、無言のまま私達はいた。

それからしばらくなると、西郷さんが中村さんを連れてやつてきていた。

そして、やつとさつちゃんが口を開いた。

「気付いてると思うけど、ずっとあなたの事避けてたんだよ」

「うん、そうだね」

やつぱりそうだったんだ。

「……それでさあ、何でそうなったか知つてる?」

私は首をかしげる。

「体育大会だよ」

ああ、あれね。

私はさつちゃんの言葉でようやくその事に気がつく。

「あの時あなたさあ、いい加減な態度をとつたんでしょう~それで沢山の人気が傷ついたんだよ?」

さつちゃんは私を攻める口調で言つた。後ろにいる一人も頷いた。

「あなたは天然だけど、やっていいこと悪いことがあるの」

分つてるよ、そんな事は。私だって悪いとは思つてたんだから。

「うん、そうだね」

そういうふたところで、最終下校のチャイムが鳴る。

私はすぐに、

「ねえ、帰りながら話さうよ」

私のそういうた声は若干かすれる。

三人はお互い顔を見合させてからさつちゃんが代表して言ひ。

「わたしはそれでもいいよ。でも、どういう状況だったのかは分らないけど」

「いいよ、別に」

私はそんな事はどうでもよかつた、早くこの状況から抜け出す事がえ出来れば。

それから、さつちゃんと私は一緒に帰り始める。

その直後、残された二人は「え、いいの？」

というふうに顔を見合させあつていた。

さつちゃんと歩き始めてから十歩ほど行つた所で、

「それじゃあ、聞きましようか」

といい、さつちゃんは様々な質問をしていく。

私はそれに答えていく。素直に答えていく。

私はそのときのことをあまり覚えていない。

ただ、さつちゃんといつていたことは正しくて、私はさつちゃんの言葉をただ認めていただけは覚えている。

そして、それらを言い終わつた後、

「じゃあ、私からはしていいことと、してはいけない事を区別する事」

少し間をおいて、

「わかった？」

「うん……」

そういつた後、別れ際の挨拶はせずに分かれた。

第十四章 再び ？

家に帰つてから、私はさつちゃんあての手紙を書き始めた。その日は金曜日だつたため、土曜日に手紙をさつちゃんの家に出しに行けばいいと言う考えだつた。

そして、これが軽く一時間掛かつて書いた手紙だ。

さつちゃんへ

まず、はじめに御免なさい。

今回の件に関しては全ての非は私にあります。それで、さつちゃんたちにも迷惑をかけてしまい本当に御免なさい。

まずははじめに、さつちゃんたちは知らなかつたかもしぬませんが、不利を間違えていた事について。

私は先輩に怒鳴られてから、その後教室での練習になつたとき、ふりの間違いに気付きました。そのため、私はずっと覚え間違えていて、それが続いてあの状況になつたと言つわけです。

二つ目は、先輩に対してへラへラと笑つていた事についてです。それは渡し的には苦笑いだつたのですが、他の人からしてみればへらへら笑つて見えていたそうです。確かに今から思えば、そう見えても仕方が無かつた事かもしません。

そして、帰り道にどうして笑つてしまつたのかと聞かれましたよね。それは怖かつたからです。さらに、さつちゃんは言つたよね。笑つてしまつたらもつと怖くなるだらうと。確かにそうかもしぬません。

でも、私の怖いは、貴方方には絶対に分りません。私は人と接する事が怖くなつてしまつました。たまに、さつちゃんたちと接していくもそう思う事はあつたんですよ。それには、暗い過去があるのですが、それはまた今度。

あと、さつちゃんたちは知らないと思いますが、私は先輩に謝り

ました。

そして、もう一度言います。

本当に御免なさい。

私のせいで迷惑をかけてしまって。

今、ここで書いたことは、貴方方にとつてはただの言い訳にしか聞こえないかもしません。

後他に何か言いたい事はありますか？

西垣優花

「ふう」

私はため息をついた。

自分なりに言葉を選んで書いたつもりだったのだが。
結構時間が掛かったなあ……。

……でも、こんな手紙意味は無いな。さつちやんたちは私を沙ち
やんたちのグループから追い出すつもりなのだろうから。

私はもう、どうでもいいと思った。

そして、その手紙を出した数日後。

「ちょっと来て」

私は廊下で歩いていると、さつちやんに腕を引っ張られた。それ
は、今までで一番乱暴で、今までで一番冷たく言つた。

私はさつちやんに連れてこられること自体驚いた。

私はもう、自動的にあの人たちとは関わらない物だと思つていた
のだから。

そして、今頃なんだ、と冷たく思つた。

呼び出された先には、あの時いた一人に加え、奥村さんと体育大
会の応援リーダーをした子などもいる。

「ねえ、あんたからくれた手紙読ませてもらたから。それで、ここ
にいる人達にも全員見てもらつたから」

は？

私の頬が僅かに引きつる。

何勝手に見せてんだよ。あれはさつちゃんだけに書いたつもりだったのに。

「あんたさあ、謝つたって言つてたじゃん。それを先輩に聞いて見たんだよ」

「うん」

あの先輩なら、誤られて無いっていうだろ？

「それでねえ、誤られて無いっていうんだよ」

「しかも、真剣な顔でね」

中村さんが途中で口を出す。

「その違いつて何？」

私は首をかしげた。

そんなもの、私の中でとっくに答えは出している。
その答えを言つたとしても、火に油を注ぐだけだ。
私の出した答えは「情」だった。

確かに私の誤り方は悪かつたかもしれない。

しかし、謝つたと言う事実は変わらない。それでも、先輩が謝ら
れていないと言うのなら、この人たちは先輩の方を信じて当たり前
だ。

それだけの事だ。

そして、私が黙つていると、

「それじゃあ…… わあ」

さつちゃんは、面倒臭そうに、そして、やりにくそうに切り出す。

それは、何もいわれなければやりにくいだろう。

「私達にはあの手紙が言い訳にしか聞こえなかつたんだけど？」

私は眉をひそめる。

それは手紙にも書いただろ？

それに全く持つて意味が分からない。

そんな事を聞かれたとしても、どうやつて交代したらしいか分か

らないだろ？

……さつちゃんが私より勉強が出来ない理由がよくわかる。

「そんな事手紙でも書いたし」

私が小声で言うと、

「ビックボイスプリーズ！」

「うつわ。発音悪。

それと、ハーレーシヨン起^レしすぎだろ。

何か人まで寄つてきたし。

「……早く用件を言つたらどうなの？」

私は早くこの場から立ち去りたかった、私が何か言つても無駄な事だらうし、ただの時間の無駄なだけである。

それに、言いたい事など鈍感な私にすら分るので。

「何か言い残す事は？」

「別に無いよ」

今度はさつちゃんに代わつて、中村さんが言い始めた。

「……えっと、その、四人で話し合つたんだけ。あの……付き合うのをやめる、っていうか。別に恋人同士の付き合つてたとかじやなくて……」

もうちよつと要点よく話そつよ。

あと、言いたいのは「縁を切る」か？

分つているが何も言わないで、うんざりしたように聞く。

「……と、とにかく、この四人は貴女と友達をやめる、てことになつたの」

やつと結論がでた、中村さんはまつすぐ元^{ヒカル}を見た。
私は誰にも聞かれないように小さいため息をついてから、

「あつそ」

私は小声で言つ。

その声が届いたのかどうかは分らない。

そして、私はすぐに踵を返した。

「あ、あれ？これで終わり？」

私たちの様子を見ていた、どこかのだれかがそう呟いたのがはつきりと聞こえた。

それから更に数日。

この一件を通して、部活でも裂けられるようになった。
卓球部に所属しており、さつちゃんと西郷さん、奥村さんも所属している。

そして、その三人の影響が強いのか、もちろん三人とは卓球をあからしていないし、他の人もしてくれない。

そのため、卓球をするための準備・整備をするのが日課になっていた。

そんなある日、

「あれ、まだ西垣さんいるよ。何するんだろ?」

「さあ?」

さつちゃんと西郷さんは、嫌味臭くそう言い、けらけらと嘲笑うかのように笑った。

私は目を伏せた。

私は卓球部を前からやめたいと思っていた、母は私が今現在独りの事を知っているし、これもいい機会だからやめようか、と思った。
そして、母に言つと、以外にも早く承諾され、卓球部をやめ、パソコン部に入る事となる。

それから、私とさつちゃんらのグループは必要最低限以外は会話をする事は無かつた。

番外編 恋

番外編 恋

「ねえ、この恋愛小説つておもしろいよね」

「えつー…そうなの〜。読み終わつたら貸してよ」

「うんいいよ〜。そんでさあ

」

私の耳にそんな会話が聞こえてくる。

恋愛小説……、か。

私は、恋愛小説は嫌いではないが、そんなにも読まない主義である。

そして、私はふと考えた。

私が恋をしたのは、何時の事だつたか

私が恋をしたのは、小学校一年生のときだつた。

私はその当時も背が小さく、そのため、背の順で並ぶと必ず一番前になる。

そして、背の順に並んだときに必ず私の隣になる男の子がいた。その男の子の名前は今でも覚えている。その子の名前は神田寛人だ。

私はその童顔の子に恋をした。

彼も私と同じように背は低かったが、私と違つてリーダーシップがはれて、しつかりものだつた。

私は彼を目で追つていたのか、あるとき、寛くんに恋をしている女の子が話し掛けてきた。

「ねえ、あんまり、調子に乗らないでよー！」

私は何を言つているのか瞬時に理解する事ができた。

「あんまり、寛くんに近づかないでよね！」

といって、去つていった事は良く覚えている。

私は口をぽかん、と開けてその少女を見ることになる。

だが、私は告白なんて事を一切することなく、引越しする事が決まり、神田寛人と合いつことは引越しをしたその日からあつたことなどなかつた。

一つ目の恋は恋と言つていいものかどうかも分からなかつた。

私が恋をした相手は東君だつた。

私はその頃は「独り」で、話す相手がいなかつたからか、と私は思う。

私の父と母は、よく夫婦喧嘩をした。

私は五歳ぐらいの頃は、その夫婦喧嘩は大した物ではないようにな感じていたが、小学校二年生のちょうど転校してきたぐらいのときに、夫婦喧嘩は怖いと思い始めていた。

私はその反面教師になつたのか、私は結婚するのならこいついう人がいい、と選んで東くんに恋をしたのかも知れない。

私はその頃から、もう既に何故か変な所で大人な考え方を持つようになり、私は恋を章がこう一年生のとき以来したことがなかつた。

そして、私は考える。

私が恋愛をすることは無いんじゃないだろうか、と。

私は、大きな伸びをした。

何か難しい事を考えたような気がする

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1810z/>

少女時代

2011年12月31日22時50分発行